

グラム実施者の問題解決に取り組む治療同盟がより強化され、問題が明確になると思われる。

## ② 養育者と子ども双方へのプログラム提供の重要性

養育者と子どもそれぞれへのセッションと、治療者を交えての合同セッションの両側面からのアプローチがあることによって、よりプログラムが効果的に運営されると考えられる。これはすなわち、個人へのアプローチ度同時に、関係へのアプローチを行っているのだと考えられる。

## ③ 複数治療者の重要性

本プログラムでは、グループということもあるが、必ず複数の治療者が参加している。それにより、多面的にクライアントをとらえられるとともに、PTSDの再現や親子の関係に緊張が生じた場合などの対応が容易になる。愛着修復のプログラムの場合、治療者が複数で治療場面に望むことが重要であると考えられる。

## V 総合考察

以上のすべてを踏まえ、総合的に考察していく。なお、主たる臨床的な観点は、すでに触れているのでそちらを参照されたい（藤岡 2003, 2005b）。

### 1. 愛着形成における視座

すでに、17年度の報告でも詳しく載せたところではあるが、今年度さらに、強調すべき愛着臨床上の示唆がある。

#### 1) 赦し（ゆるし）の儀式

本報告書の事例の中でもあったように、このトリートメントで活用される再演（心理劇）には、虐待やネグレクトをしてしまった親あるいは祖父母が出てくる。そして、しっかりと、抑えられていた感情を表出するセッションを設け、さらに、その後、被虐待の子どもによって、その親や祖父母を赦すという場面が設定されている。ここではあえて、forgiveness に対して「許し」ではなく、「赦し」という言葉を使った。これは、トラウマティックな体験を抱え苦しんでいる人たちがその体験に色づけられたさまざまな感情を整理し、折り合っていくのにとっても重要な作業といえる。

この事例もそうであったように、虐待や放棄のような生みの父親（あるいは母親）の問題は、中心的な焦点になる。心理劇による再現は、子どもと生みの父親（あるいは母親）との間の外傷的な問題を喚起したり解決したりするために役立つ。子どもは、生みの両親の喪失に関してさらに深く嘆き悲しむ過程の機会を与えられる。喪失への悲嘆 *grieving* と服喪追悼 *mourning* は、癒しの過程において本質的な要素であると考えられる。悲しくつらいことであるが、過去の解放を促進し、新たな未来を創造し、赦しの開始を導くことができる（Levy, T. M. ら 1998 参照）。子どもは、喪失感情を表現し、両親の人生に関する疑問を尋ねることによ

って、実親の問題の終結へと移行することができる。例えば、「両親」（実父母）は虐待あるいはネグレクトを受けた自分達の幼少期に、何が起こったかを説明するかもしれない。「両親」に対する子どもの深められた理解は、いくつかの目的をもたらす。「両親」と異なり、子どもは援助を受けており、今は自由に別のより良い選択をすることができる。次にそれは、より共感的な赦しの態度を促進する。赦しの概念にはいくらかの意味がある。セラピー上では、赦しには外傷的な出来事に結びつく苦痛や怒りの解放が含まれている。子どもにとっての目標は、両親の虐待の責任を認めることだけではなく、心の中にある（かけがえのない）両親を情動的な苦痛の負担から解放することでもある（levy, T. M. ら 1998 参照）。

里親支援においても同様のことが大事であろう。内的な実父母像は、直面や赦しの作業によって、子どもの人生は再出発に向けて動き始めることができる。

## 2) 愛着の見直しによる「更なる愛着形成」「更なる愛着修復」

事例で見てきたように、このトリートメントを通して、両親の子どもを見つめるまなざしが大きく変化していった。藤岡（2006a）は、愛着関係の再構築・修復を論じる中でまなざしや会話の重要性を指摘している。会話やまなざしを成立させる相手への「共感性」の基礎に、「人と共にいて心地よさを感じる」ということがある。「人と共にいて心地よさを感じる」というのは、そのような体験をしていれば、その感覚自体を予測することが可能となり、そのような場に身を置くことでますますその感覚は確かなものになっていく。しかし、成育歴の中で、人と共にいて心地よさを感じられることが少なかったり、逆に不快な体験が感情の基底にあたりする場合、心地よさを得ることは難しくなる。親と子どもの関係では、時間のかかることであり、根気強くじっくりと関わるが必要となってくる。「共にいることの心地よさ」を形成する重要な役割を果たすのが食卓であると言われている。食事の時間を共にし、たわいもないことで笑い、料理を楽しむというさりげない日常の中にこそ、「共にいることの心地よさ」を味わう素地があると言える。また、食卓での場面に限らず、会話やテレビ、スポーツ・芸術などを通して、一緒に活動したり、笑ったりすることも「共にいることの心地よさ」を味わい、育てる上で重要であることは言うまでもない。関わりのエピソードの蓄積が愛着関係の再構築に役立つという視点であり、親や家庭が「安全基地」になることを意味している（日常的な愛着修復）。さらに、つらい思いをしているときにこそ、そばにいてこと・見守ること・絆を再確認することで愛着関係は確かめられ、修復されていく（危機介入時の愛着修復）。日常的な愛着修復、危機介入による愛着修復、ともに重要である。たとえ良好な乳児期を過ごしていても、思春期にいたって、そこでさらに愛着関係が見直され、再構築されていくのであるということを思春期臨床においても勘案しなければならないだろう。

施設職員からのヒアリングでは、日常的な愛着形成のことは強調されても、危機介入場面でこそ、愛着が深まるという発想は聞いてこなかったという感想を多くいただいた。困難なケースであればあるほど、このような危機介入場面は重要であり、経験を有するというのは確かなことであるが、経験者が関わることで、経験者との愛着はますます深まり、一方十分な経験を有しないケアワーカーは、それまでの地道な日常的なかわり続けてきても、一回の危機場面での対応がうまくいかないことで一気に今までの関係性が崩れるということがある。施設内の経験者は、危機介入時の信頼関係の構築と共に、こ

れまでの養育者（担当性を敷いている場合は、担当者）にしっかりと「つなぐ」という役割も担わなければならないだろう。そうでなければ、施設職員が育っていかない。この点は、危機的な事態での里親のかかわりと、それを支える児童相談所の職員との関係でもいえることであろう。里親と里子がうまくいかないときこそ、里親支援の好機であり、かつ、里親と里子の愛着形成の大きなチャンスであることをもっと認識しなければならないだろう。

同じことは実親にとっても同様であり、結婚時、第一子誕生時、第二子誕生以降、実父母との死別、きょうだいとの死別、パートナーとの死別など、人生の節目節目で自身の愛着関係の見直しを図っていかなければならないかもしれない。このような見直しを行っている限り、虐待やネグレクトに至る事例は大きく異なってくる事が予想される。

### 3) リラクゼーションと愛着形成

すでに述べたように、藤岡（2005b）は、愛着形成において日常的なかかわりだけでなく、緊急危機介入時に愛着が深まる、あるいは愛着のことを見直すきっかけができることを示唆している。事例の中でも HNP におけるリラクゼーションへの配慮は随所に見られた。「修復的愛着療法では、日々の安定した関わりのなかとともに、関係性の中で起きるリラクゼーションに至るプロセスで、愛着が起きると考えている。リラクゼーションが臨床的な変化を促す上で重要なことは従来から指摘されているが、ここでもその点が強調されている。リラクゼーションを通して、親と子、セラピストとクライアント間に信頼やつながりが深まる。緊張している時ではなく、このリラクゼーションが進んだ状態が愛着の形成に適した時期である。（藤岡、2005b）」さらに、事例のなかで、セラピスト B によって演じられた祖父や父親が登場することで、クライアントの危機感が高まり緊張感が増す。その状態をセラピストあるいはパートナーにとって支えられ、励まされることで、克服しようとする。その際の愛着形成の局面はすさまじいものがある。すなわち、このことを施設における子どもへのかかわりに置き換えてみると、危機介入時は、子どもたちの緊張感は非常に高まっており、通常であれば職員であればできるだけ子どもとのかかわりを避けたいと考えるときなのかもしれない。しかし、むしろ、そのテンションが下がっていき、リラクゼーションが起きる場面にしっかりと関わることができるという意味で、愛着形成の視点から見ていくと、最も適している時間となると考えられるのである。愛着の形成において、日常的な安心した構造の繰り返しは、「安心感」の醸成に役立つことが知られている。睡眠、食事、入浴などの日常性の重要性は、愛着形成にとってとても重要である。しかしそれに加えてさらに、パニック場面、フラッシュバック場面、あるいは、問題行動を引き起こしてしまった場合など、緊張が高まったときにこそ、愛着の愛着の深まりが図れるということは、強調していかなければならないことであろう。このように、愛着形成には、「日常生活場面」と「危機的場面」の二つの局面があるといえる。

## 2. 日本におけるプログラム適用の必要性

本研究で作成したプログラムは、多くの面で活用できると考えられる。今後は、これらのプログラムが様々なところで活用され、改善されていくことが望まれる。

特に、児童養護施設においては、施設内コンサルテーションの一環として、心理職によるケアワーカーに対する支援として、人生脚本や養育のためのペアレンティング技法などが活用されることが望まれる。また、一方で、事例の中で紹介している、クマのぬいぐるみをつかった「インナーチャイルドメタファー」や、紙・ボードなどを使った「最初の一年の愛着サイクル」は、施設内における心理面接の一技法として十分に活用可能と考えられる。

ある施設心理職の方は、この「最初の一年の愛着サイクル」を入所児童に適用し、思いがけない成果が得られたことを報告している。それは、入所児童及び心理職、ケアワーカーの3人での面接設定で行われた。この方法を適用することで、児童は、堰を切ったように小さいときからの歴史を語り始めた。そして、そのセッションの後、この施設にいるときはこのことを自分の胸にしまっておこうと考えていたが、ケアワーカー及び心理職に共有してもらえたことで、前向きに物事を考えられるようになっていった、と語った。「これまで、こんな悲惨なことは、自分の心のなかにしまっておくことと思っていた」という。しかし、心理職やケアワーカーによる「最初の一年の愛着サイクル」の関わり（赤ちゃんのときのことをイメージすることで、子ども自身の愛着形成場面を振り返り、乳幼児期の様々なネグレクトや虐待は「あなたが悪いから起きたのではない」、というメッセージを子どもに送ること）によって、大きく変化していった。

また、クマのぬいぐるみをつかった「インナーチャイルドメタファー」は、クマのぬいぐるみという目に見える形あるものを使うことで、子どもがそのクマのぬいぐるみをどのように扱うのかということを見ることによって、子ども自身のインナーチャイルドに対する向き合い方をアセスメントできる。遠ざけるのか、抱っこするのか、なでるのか、ぞんざいに扱うのか。子どもたちは様々なかかわり方を見せてくれる。クマ（小さきときの自分）の気持ちを語るときに、クマの口を自分の耳元にもってくるしぐさをする子もいる。それらのアセスメントを常に踏まえながら、セッションを続けることができるのがこの方法の優れている点である。

また、「ちっちゃな自分（クマ）」が、ケアワーカーに何を望んでいるのか、ということ聴くことで、心理面接室と生活場面を結びつけることもできる。このように、生活場面を意識した心理面接ももっと開発されていくべきであろうと考える。

さらに、すでに述べたことではあるが、愛着障害のアセスメントを施設内で共有することで、それぞれの専門性の範囲内で役割分担ができると考えられる。担当性を敷いている施設では、難しい子どもであればあるほど、職員は抱え込みやすくなる。そして、どうしても冷静に子どものことが見えなくなってしまう傾向にある。そのような点からも、徴候チェックリストを活用することで、定期的に、子どものことをアセスメントし、システム的な関わりを含めて、見直す機会をうることができよう。難しい子どもであるからこそ、心理療法ではなく、生活のなかでの生活リズムの建て直しと基本的な信頼関係の構築を目指すということももちろん選択肢の一つに入ってよいであろう。

### 3. 複数のスタッフによる適用の可能性

修復的愛着療法での再演技法は、少なくとも二人のスタッフを必要としている。今後日本での適用を

考える場合、同時に二人のセラピストが面接室に入ることでのチームアプローチがもっと開発されていくべきであろう。一方で、ひとりでもできる再演なども日本独自に開発されていくべきであろう。

特に、すでに述べたような施設内でのセラピストとケアワーカーの合同のセッションなど、もっと工夫されてしかるべきであろう。

#### 4. 二週間トリートメントプログラムと継続的なプログラムの併用の必要性

二週間集中プログラムは、有効なアプローチであることが検証されてきているが、日本での実現の可能性はいまだ未知数である。その点、ヒアリングさせていただいた児童相談所ですでに隔週の集中プログラムが実践されているのは、大いに参考となることである。

かなりの時間を費やして、子どもと親の分離プログラム及び合同プログラムを実践できているのは優れた方法であろう。このヒアリングでも明らかになったことだが、親子合同のセッションは、親子の関係性のアセスメントとそれに対する介入の方策を検討する上で、極めて有効な時間設定であろう。

#### 5. 施設職員支援、里親支援における愛着形成プログラムの活用の必要性

今、現場では、具体的な援助技法が求められている。ますます困難な児童が入所している状況の中で、具体的で有効な技法を、職員や里親は藁をもすがる思いで待っている。これまでの子育て技法は、技法ばかりが優先され、その技法の使い手についてあまり問題にされることがなかった。親自身、あるいは施設職員や里親自身が癒され、自身の問題が子育て場面で露呈することなく、有効な愛着形成に向けての援助技法が行われることが望ましいであろう。施設職員や里親に向けてのコンサルテーションも、この点の吟味がさらに必要となるであろう。人生脚本や共感疲労の自己チェックリストは、このような自己理解に大きな力を発揮するであろう。今後の施設職員の研修や里親養成の研修にさらに活用されていくことが望まれる。そのようなニーズに応えられるだけの内容をすでに十分有していると考えられる。すでに、筆者らが関わる養護施設や里親支援の文脈の中で活用が始まっている。今後、このような活動の実績が積まれていくことが望まれるし、適用に当たっての吟味がさらに慎重に行われなければならないだろう。

## VI おわりに

以上、研究の概要について整理してきた。愛着形成プログラム適用のための留意点を検討するための実践の場をえつつ、かつ、プログラムをさらに精選させていかなければならないと考えている。

最後になりましたが、以下の方々に心から感謝の意を表します。本研究の機会を与えていただきました厚生労働省の関係各位の皆様、惜しみない支援をいただきました本研究の主任研究者でいらっしゃる庄司順一先生、最初の出会以来一貫して多くの示唆を提供してくださっている、エヴァーグリーン愛着対処訓練研究所（心理療法センター）のテリー・M・リヴィー博士、マイケル・オーランズ心理療法

士、アンセア・コースター博士、そしてデンヴァー在住の臨床ソーシャルワーカー ヘネシー澄子博士、さらに、研究協力者として共に議論し、共に考えていく機会を惜しみなく作っていただいた加藤尚子先生（目白大学人間社会学部講師）に心から謝意を表します。

#### <参考・引用文献>

- American Psychiatric Association. 2000 Diagnostic and statistical manual of mental disorders (4th ed. Text Revision). Washington, D. C. : American Psychiatric Association. (高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 訳 DSM-IV—TR 精神疾患の診断・統計マニュアル 新訂版 医学書院 2002)
- Crockenberg, S.B. 1981 Infant irritability, mother responsiveness, and social support influences on the security of infant-mother attachment. *Child Development*, 52, 857-865.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Higgitt, A. and Target, M. 1994 The theory and practice of resilience. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 35, 231-251
- 藤岡孝志 2001a 児童の心理的特性の理解 生活と福祉 No.547 29□32
- 藤岡孝志 2001b 児童の心のケアと援助 生活と福祉 No.548 24 □27
- 藤岡孝志 2001c 児童虐待と愛着障害の関係性に関する研究  
日本社会事業大学研究紀要 第48集 423 □458
- 藤岡孝志 2002a 児童福祉施設における心理的支援に関する研究  
日本社会事業大学社会事業研究所年報 第38号 27-46
- 藤岡孝志 2002b 不登校児童の体験様式と援助方法に関する研究  
日本社会事業大学研究紀要、第49集、135-150
- 藤岡孝志 2003 愛着障害の子ども及びその親への修復的愛着療法に関する研究  
日本社会事業大学研究紀要 第50集 97-120
- 藤岡孝志 2004a 対人援助職のバーンアウトと二次的トラウマティックストレスに関する研究 日本社会事業大学社会事業研究所年報第40号 13 - 29.
- 藤岡孝志 2004b 児童虐待と解離性障害の関係性に関する研究—ピエール・ジャネーの「解離」概念と臨床技法を手がかりとして— 日本社会事業大学研究紀要 第51集  
189 - 214.
- 藤岡孝志 2004c 不登校 伊藤美奈子・宮下一博編 シリーズ荒れる青少年の心 関係性の病理 『傷つけ傷つく青少年の心』 北大路書房 61-67.
- 藤岡孝志 2005a 対人援助職の二次的トラウマティック・ストレスと解離に関する研究 日本社会事業大学研究紀要 第52集 149 - 163.
- 藤岡孝志 2005b 修復的愛着療法の日本への適用に関する研究 日本社会事業大学社会事業研究所年報第41号 287 - 303.
- 藤岡孝志 2006a 不登校 伊藤美奈子編 朝倉心理学講座16 思春期・青年期臨床心理学 朝倉書店 73 - 89.
- 藤岡孝志 2006b 不登校の事例研究 亀口憲治編 現代のエスプリ別冊 事例に学ぶ心理臨床実践セミナーシリーズ『臨床心理行為研究セミナー』 156-168.
- 藤岡孝志 2006c 怒らない子・怒れない子にどうかかわるか 児童心理 No.847 「怒りをコントロールできない子」 金子書房 44-48.
- 藤岡孝志 2006d 「解離」概念の再評価—ピエール・ジャネーの臨床的アプローチを通して— 精神医療 No.44 . 18-29.
- 藤岡孝志 2006e 虐待と愛着障害—修復的愛着療法— そだちの科学 No.7 (特集 愛着ときずな) 日

本評論社 107-112.

- 藤岡孝志 2006 f 愛着臨床の観点からみた児童虐待への対応に関する研究 日本社会事業大学社会事業研究所年報第42号 印刷中
- 藤岡孝志 2006 g 福祉援助職のバーンアウト、共感疲労、共感満足に関する研究  
— 二次的トラウマティックストレスの観点からの援助者支援 — 日本社会事業大学研究紀要 第53集 印刷中
- Fujioka, T. 2003 Dohsa ( Human Motor Action ) Therapy as the treatment for children with some disorders. Journal of Social Policy and Social Work Vol. 7. 3-14.
- Fujioka, T. 2004 School Nonattendance -Psychological and Social Services in Japan-. Journal of Social Policy and Social Work Vol. 8. 5-22.
- Fujioka, T. 2005 Art Therapy as the treatment for children with some disorders. Journal of Social Policy and Social Work Vol.9. 29-44
- Fujioka, T. 2006 Compassion Fatigue and Dissociation -Through The Clinical Approaches by Pierre Janet- Journal of Social Policy and Social Work Vol.10. 23 - 33.
- 藤岡孝志・加賀美尤祥・加藤尚子・和田上貴昭・若松亜希子 2003  
児童福祉施設における協働と心理的支援に関する研究  
日本社会事業大学社会事業研究所年報 第39号 63-84
- ヘネシー澄子 2004 子を愛せない母、母を拒否する子—今増えている愛着障がいがある母と子の絆の大切さ— 学習研究社
- Howe, David. 2001 Attachment Theory for Social Work Practice. Macmillan Press 1995  
(平田美智子・向田久美子訳 デビッド・ハウ「ソーシャルワーカーのためのアタッチメント理論—対人関係理解の「カギ」—」筒井書房 2001)
- 加藤尚子 2006a 心理コンサルテーションに関する基礎的研究—虐待を受けた子どもの援助職への適用を目的として— 子どもの虐待とネグレクト Vol.8 No.3 376-387
- 加藤尚子 2006b 虐待を受けた子どもの援助職への心理コンサルテーションの適用に関する文献的考察—児童養護施設における協働的心理支援モデルの構築に向けて—コミュニティ心理学研究 第10巻1号(印刷中)
- 小林咲子 2005 児童虐待と愛着障害に関する研究 日本社会事業大学卒業論文(未公開)
- Levy, T.M. & M. Orlans 1998 Attachment, Trauma, and Healing—Understanding and Treating Attachment Disorder in Children and Families—. Child Welfare League of America, Inc.; Washington.  
(藤岡孝志+A T H研究会訳 愛着障害と修復的愛着療法—児童虐待への対応— ミネルヴァ書房 2005)
- Levy, T.M. (ed) 2000 Handbook of attachment Interventions.  
Academic Press; New York.
- Levy, T.M. & M. Orlans 2006 Attachment Disorder and Corrective Attachment Therapy. Workshops in Japan (Tokyo; Japan College of Social Work).
- van den Boom, d.C. 1988 Neonatal irritability and the development of attachment. Unpublished doctoral dissertation, University of Leiden, The Netherlands. Cited by Levy, T.M. & M. Orlans 1998 Attachment, Trauma, and Healing—Understanding and Treating Attachment Disorder in Children and Families—. Child Welfare League of America, Inc.; Washington.
- ZERO TO THREE 1994 Diagnostic classification of mental health and developmental disorders in early childhood. Arlington, VA: ZERO TO THREE/National Center for Clinical Infant Programs. (本城秀次・奥野光 訳 精神保健と発達障害の診断基準—0歳から3歳まで ミネルヴァ書房 2000)
- Orlans, M & Levy, T.M 2006 Healing Parents—Helping Wounded Children Learn to Trust & Love— Child Welfare League of America, Inc.; Washington.

## 研究成果の刊行に関する一覧表

著者名	タイトル	発表誌名	巻号	ページ	出版年
庄司順一	里親とのきずな	そだちの科学	No.7	49-54	2006
庄司順一	今、求められる子どもの自立支援とは何か	月刊福祉	2006年 4月号	18-23	2006
庄司順一	里親制度を発展させるために	保健の科学	Vol.48, No.11,	852	2006
庄司順一	里親制度の現状と課題	里親と子ども	Vol.1	6-11	2006
庄司順一	オーストラリアのある里親援助機関の初期研修プログラム	里親と子ども	Vol.1	44-51	2006
澁谷昌史 庄司順一 有村大士 ほか	里親への初期研修の実態	里親と子ども	Vol.1	70-79	2006
庄司順一 澁谷昌史 有村大士 ほか	里親初期研修モデル案	里親と子ども	Vol.1	80-109	2006
澁谷昌史 小山修 庄司順一 ほか	里親制度の現状課題(V) 専門里親及び親族里親の実態と課題に関する研究	日本子ども家庭 総合研究所紀要	第41集	43-61	2006
小山修 澁谷昌史 才村純 ほか	国際養子縁組制度に関する国際比較調査研究	日本子ども家庭 総合研究所紀要	第42集	71-80	2006
小山修	研修の進め方	里親と子ども	Vol.1	12-20.	2006
鈴木力	施設養護における子どもの権利と人権を擁護する養育の質的向上への視点	社会福祉 (日本女子大学社 会福祉学会)	第46号	13-26	2006
鈴木力	児童養護施設における環境と関係からの自立支援の意味	福祉文化研究	第15号	15-30	2006
鈴木力	「ある日の私と子ども」をめぐって	季刊児童養護	第37巻2 号	6-7	2006



著者名	タイトル	発表誌名	巻号	ページ	出版年
藤岡孝志	虐待と愛着障害-修復的愛着療法-	そだちの科学 (特集 愛着とさ ずな)	No.7	107- 112	2006
藤岡孝志	愛着臨床の観点からみた児童虐待への対応 に関する研究	日本社会事業 大学社会事業 研究所年報	第42号	(印刷 中)	2006
藤岡孝志	怒らない子・怒れない子にどう関わるか	児童心理	No.847	44-48	2006
加藤尚子	虐待を受けた子どもの援助職への心理コンサル テーションの適用にかんする文献的考察～ 児童養護施設における協働的心理支援モデ ルの構築に向けて～	コミュニティ 心理学研究	第10巻1 号	(採択済 み, 印刷 中)	2006
加藤尚子	心理コンサルテーションに関する基礎的研究 ～虐待を受けた子どもの援助職への適用を目 的として～	子どもの虐待と ネグレクト	Vol.8 No.3	376-387	2006